



…パーティーの後
フローレイティアさんの部屋に呼び出された

ヘイヴィアも一緒かと思ったが姿は見えない

火を点けたら 爆発するんじゃないかというくらい
アルコールの匂いが充満している

「あつ くうえんしゃー♪ 来たわね」

薄暗い灯りの中 名前を呼ばれた…



キリッ

〜〇〜

「ゴブローレイティアさん!?」

この部屋に居るのはこの人しかありえないのだが
さんなお迎えはあまりにも予想外だった!

「酔いすぎじゃないですか」

ラツキーだけでも乱れすぎですって
もうちよつと節度を持って...」

「ぜんぜん酔って にやいわよ...

られが酔っぱら...ひっく ☆■◎△わよ!」

「もう何言ってるかさっぱりですよ!」



「わおっ！ 見えています！ これ不可抗力ですよ！」

ポリュームたっぷりの乳房に
ちよこんとピンク色の乳首

いわゆるおっぱい

絶景をしっかりと目に焼き付けながらも
わざとではないと主張をしておかなければ
後でどうなるか分かったもんじゃやない！

「お前 頑張ったから ひっく」

「いつ使えるか分からない賞与か ひっ 今すぐに使える避妊具
どっちか好きな方を あげるわ」

き、聞き間違いか…今すぐ!?



「お姫しゃまには内緒にして おいてひっ あげるわよ？
私は何れも 知ってるんだから♡ひっく」

「丸出してキリツとされても…」

「今なら おまけに…
貴いなしやいよ ひっく」

目の据わった爆乳上官の選択はま
既に決まっているよう

もう無事に帰れる気がしない…

「ゴ…ゴムの方を いただきます」





「素直が一番よ
脱ぎなしゃい
ひつく」

うい

o-

o-

服を脱いで横になると そのままフロレイティアさんが馬乗りに跨ってきた
ぎゅつとペニスを握り ワレメにあてて くにくにくと擦り合わせていたが
狙いを定めて動きを止め ゆっくりと腰を落とす

ぬつぶぶぶぶ… つぶちゅんっ

フロレイティアさんは目を閉じ

感触を味わいながらペニスを飲み込んでいく

「…うっ んんっ んん…」

強烈な圧迫感が根元までまとわりつき

肉茎全体を熱く包み込む

「思ったより…」

奥まで入ってくる…

のね ひっく…」

本当に挿れてしまった

上官とこんな関係になると 後々の生活に支障を来しそうで少々心配だが…

そんな心配などお構いなしに ペニスは素直にいきり立ち

フロレイティアさんもぬぶぬぶと動き始めた…

「お前は 絶対
動くんじゃないわよ！」
「動いたら…
セクハラからなる!!」

あ

あ

ん、ん、ん

ん、ん

ん、ん



ろれつの回らないフローレイトイアさんが美しい銀色の髪を揺らして腰ごと上下に弾みキツく締まる膣肉でペニスを扱っていく

「はっ…はあっ いつもお姫しやまや 私をいやらしい目つきで見てひつく溜め込んだ子種は没収よっ 全部吐き出しなさいっ♡」

あ

あ

ちゅぷっ

ちゅぷっ

ちゅぷっ

ちゅぷっ

結合部からはくちゅっくちゅっくと生暖かい体液が溢れサオを伝って太ももへ流れ落ちる

ひゅっひゅっ

ぬっ

ぬっ

膣内に受け入れきれなかった精液がどぶつと溢れ出る
ついでにやってしまった事の証を見て全身から汗も噴き出る
「熱い…これが…膣内射精…」

…すっかり全部注入してしまった

呆然としているラローレイティアさんからは

感情を読み取れず声も掛けづらい…

「あの…」

「よくも膣内射精したわね

子宮に お前の青臭いザーメンが…」

しかしこれつきり…

いつもの調子で叱られる事は無く

恋人のように甘えるでもなく

もう帰れと言う

んん

んん

んん

んん

んん

誰かに目撃されると問題になってしまうので たしかに長居もできないだろう

一応フロアレイティアさんにお礼を言い 部屋を出ようとした時

アルコールの匂いに混じって少し血の匂いがした…

…次の日

フロレーティアさんがひよこひよこ歩きながら近づいてきた

「クウエンサー 昨夜その… 少し記憶が無いんだけど 何か知ってる？
お前と飲み直そうと思っって呼び出して…」

もしかして私の部屋に来た？ 来て…えっと …何か

記憶は無いけれど 少し違和感があるというか…

なんとなくお前が部屋に居たような気はするんだけど…」

それから暫くの間 いつ処刑宣告がくるものかと
ヒヤヒヤとした日々を過ごしたのだった…



こんなのがいいの？
気持ちいいの？

まったくお前は…
何でおつきくしてるのよ

フローレイティアさんの
いい匂い嗅いだらつい…

あつこれつて
もしかして…

お前が射精したら
もれなく私の顔が
被弾するんじゃないの？
所謂 BUKKAKE…

あ〜…

じと…

そそそ
そんなことないですよ
意外と大丈夫ですって！

やっぱヤメ…

じゃ一回だけ
お願いします！

えっ!? あつ
ちよつとつ

ゴム
無いわよ

あつちの
茂みで!!

あんつ
あつ
あつ
もつつ
あつ



「あんっ あんっ♡」

ぬちゅっ！ぬちゅっ！ずちゅっ！

大自然の中では卑猥な水音も甘い嬌声も
壮大なさざめきの一部に過ぎない

「ホントにお前はまぐわう事しか
考えていない男ね あんっ♡」

あーっ

あーっ

あーっ

あーっ

「…たしかに あんっ 気を紛らわせるとは言っただけど…♡」
「でも何もしてないのに グチヨグチヨに濡らしてたのは誰でしたっけ？」
「言ってくれるわね♡ あっ♡ あんっ♡」

ぬぷっ！
ぬぷぷっ♡
ぬぷぷっ♡
ぬぷぷっ♡

「んああっ… あんっ♡♡♡」

開放感のお陰か
少し強引に合体を始めて
真っ白い爆乳をぶるんぶるんと
ワイルドに揺らしても怒られない

「ココもいつもより受精する気満々みたいですよ」

一番奥まで肉茎をハメ込んだまま 亀頭の辺りを手でさすると
膣肉がペニスに絡みついてキュウつと締め付ける

「んんっ♡んんうーっ お前っそこはダメええっ♡」

「フロートイテイアさんには さんざん仕込まれましたから」

「お前の上司になってから エキサイティングな作戦ばかりで性欲が収まらないのよ
…はあっ …はあっ お前のせいなんだから当然でしょ♡」

あーっ♡

あーっ♡

にゅぷっ にゅぷっ♡

ストロークの長いピストンで 愛液の泡立つ肉壺をゆったりかき回す

「あっ あんっ♡ ねえクウエンサー 時間も無いし早く射精しなさい？」

フローレイティアさんが射精を促す…というより自分が絶頂したいのだから

高まった性欲を交え始めてから 何度か絶頂寸前まで達したことはお互いに気付いている

ずぶっ ずぶっ♡ ぬぶっ♡

「ほら、お前の大好きな膣内射精していいのよ？ あんっ♡」

「最後なんだから じっくり楽しまなきゃ 死んでも死にきれませんよ」

「何を言ってるのっ そんな場合じゃないでしょ ふああん あんっ♡」

寸止めに耐えかねたフローレイティアさんが どうにか自分で違うポイントを擦ったり

挿入角度を変えようと腰をくねらせているが 地に足の付かないこの体位では

自慢の攻撃的なピストンもままならず 生殺し状態が続いている

「もう何回もイキそうになってるのに… お前わざとでしょっ！」

にゅぷっ にゅぷっ♡ にゅちゅっ にゅちゅっ♡

「あっ あんっ♡ そろそろイカせなさいっ お前のおちんぽなら簡単でしょう!？」

おねがいつ もうイキたいのっ 子宮が欲しがってるのよっ!!」

時間さえあれば もっと上官の可愛いおねだりを聞き流してたいが…

本音が出たところで 次第にピストンを速めていく

「私に種付けするラストチャンスなんだから
あんっ♡ 本気でズコズコしなさいっ!!」

「そんなに言うならお望み通り」

スケベ上官の発情おまんこに最後のご奉仕しますよっ!」

絶頂寸前の膣肉が震えるのを感じながら
力任せにズチュッズチュッと突き上げる
すでに精液が滲み出ている肉根で

あゝあゝ

あゝあゝ

「ひああああんっ♡ すごいっ!! ゴリゴリしたのきたっ!!♡」
さんざん焦らされて蕩けきった子宮ごと
射精の瞬間に向けて痙攣を始めたペニスで
絶頂へ突き上げていく

「あっ! あっ! あんっ! あんっ! あんっ!♡」
そして次の瞬間 熱く膨張した亀頭を
子宮口に密着させたまま 悦楽の証を破裂させた

びゆくんっ!! びゆるるるっ!! びゅびゅびゅっ!!

「んっぐっ んんーっっ!!♡」

あゝあゝ

びゆるるっ！ びゆるんっ！ びゆるるるっ…!!

数多の貴族の男が争って狙う子宮へ 子種汁を注ぎ込んでいく
「あっ… ああ… はっ… はっ… はっ… はっ… はっ… はっ… あっ… あ…」

絶頂感はず子宮から太もも、膝肩へと痙攣を伴って広がり 幸福感へ変わっていく

「あっ… ああ… はっ… はっ… はっ… はっ… はっ… はっ… あっ… あ…」
絶頂を迎えた女壺はビクツビクツと締め付けてペニスに吸い付き
熱い精液を絞りながら残らず飲み干していく

びゆるる!!



一度の射精では物足りないが 心配することはない

たぶんフローレイティアさんも同じだろう

生きて帰ればきつと続きが待って…

「覚えてなさい！ セックスの恨みは怖いんだから♡」

やばい…格言みたいに聞いたこともないこと言われた…

「絶対…生きて帰るのよ」

チクチク…

フワッ…

いつもの朝　いつものベースゾーン

いつもの感じで作戦について詳しく聞こうと思い

フローレイティアさんとヘイヴィアを探しているのだが…

姿が見えず　かれこれ二時間ほど彷徨っている

まさか平日の朝っぱらから　ビリヤードなんてしてないよな
と思っていたが　部屋の中から声？が聞こえる

一応室内を確認してみると…

…ばんっ ばんっ ばんっ

すらっと伸びる ストッキングに包まれた美脚
爆乳をピリヤード台に押し付けて腰を折り
立ったまま犯されているフロレイティアさんがいた

そして後ろで激しく腰を振り
フロレイティアさんの白いお尻を鳴らしているのは
いくつもの修羅場を共にくぐり抜けてきた相棒
…ハイヴィアだった



ちゅばんっ ちゅばんっ ちゅばんっ

肉同士のぶつかる音に 水音が混ざり静かに響き渡る
「フロレイティアさんは 弱いくせに勝負好きっすよね」
「うるさいわね 今日には 調子が悪かったただけだ」

ばんっ ばんっ ばんっ♡ ばんっ♡

「おかげでこうやって イイ思いが出来るんですけど」
「くそ... 負けは負けだから仕方無いか」

息を荒げ夢中で交尾を続ける相棒とは対称的に
フロレイティアさんは 他人事のように平然としている

「ふんっ まあ... たまには絞ってやらないと
誰かに手を出しちや困るって思ってたところよ」

「はいはいw」

ぬちゅっ ぬちゅっ ぬちゅっ♡

「あーすげえ気持ちいい フロレイティアさんの中
温かくてちんぽに吸い付いてきて...」

「もう... そういうのいいから 出すもの出しちゃいなさい」
「もっと強くパンパンして 強い行為を求めろが
ヘイヴィアの言葉を遮り 強い行為を求めるが
本人は興味無さそうに煙管を啜えている

本人は興味無さそうに煙管を啜えている

ばんっ！ ばんっ！ ばんっ！ ばんっ！

「うっ！」
ヘイヴィアがフロレーレイティアさんの様子を伺いながら
時折ピストンを速めると 押し殺した声が漏れる

「ほんとに結構楽しんでるんじゃないんですかっ
さつきより濡れてきてますよ」

「うるさいっ お前誰に向かって言ってるのよ
お前のちんぼなんて 平凡過ぎて全然楽しめないわよ」

「うわあ… なんだか自信が無くなりそうで
こつちが罰ゲーム受けている気分っす！」

「えっ あ、ああ…まあまあ 気持ちいいわよ？
ほら そこ奥でグリグリしなさい」

「ヘイヴィアがフロレーレイティアさんのキュツとくびれた腰を掴む
「でもっ そろそろっ！」



ばんばんっ ばんばんっ ばんばんっ!!

射精の瞬間が近いのは明らかだった
ヘイヴィアは セックスを楽しむような腰つきではなく
目の前のメスに子孫を根付かせようと ピストン運動を速めている



⑤

「罰ゲームとは言え 膣内射精させてくれる
気前の良い美人の部下で良かったっす!!」
「はあ? 中出しまで許可した覚えは無いわよ」

ばんばんっ!! ばんばんっ!!

「このままっ一緒にイキましようよっ」

「お前: 最初からそのつもりで:」
「まさか 拒否されれば外に出すつもりですよ 一応」

④

③

恐らくヘイヴィアは抵抗されようが 膣内へ射精するだろう
これまでの会話や 行為で許される境界を
ヘイヴィア自身が感じ取っている

何よりコンドームを装着させないまま容易く挿入させている事が
妊娠にさほど危機感を持っていないことを示している



「抵抗すると 逆に喜ばせそうだから …好きにきなさい」
「よっしゃ 中出しの合意ありがとうございますっ！」
「くっ」

もしかしたら避妊のために何か薬を常用しているのかもしれない
それなら膈内にくぐら子種を撒いても 孕ませることは出来ない

しかし孕ませること以上に

このドS上官に膈内射精を許可させた、という事実には価値がある

「ただし いざという時は私も好きにさせてもらおうよ」

「っさすが その冷めた眼差しも最高のすっ！」

「責任は取りますよっ カピストラーノ家のじゃじゃ馬に
種付けしたなんて 英雄も良いところっす！」
「…最低っ 中出し魔のド変態」
この罵倒が 堰き止めていたヘイヴィアの欲望を決壊させた



「つくつ…もうっ 限界っつ!!」

びゅるんっ!!

へいヴィアは一番奥に肉棒を納めたまま 膣内に射精を始めた

どびゅるっ!! びゅびゅっ:!!

「ん?」

二度、三度と腰を密着させたまま痙攣すると

更に大きくピストンして最後の一滴まで膣奥に精液を送り込んでいく
ぶびゅっつと二人の結合部から 白い粘液が溢れ始める

びゅっ: びゅくっ:~

「お前! ほんとに: くそっ!」

フローレイティアさんは体を強張りさせ しかし一切の抵抗を見せずに
流し込まれるへいヴィアの精液を受け入れていた

泡だった結合部から 肉棒が引き抜かれると
白い粘液が 長い糸を引き 吊り橋のように
二人の生殖器を一瞬繋げていたが ベトツと滴り落ちた
「はあ はあ はあ はあ はあ！」

「この事は …誰かに言ったら 殺すわよ」
行為そのものに関しては口止めしているが
膈内粘膜を汚したことを咎める様子は無い

「はあ はあ 分かってますって」
フローレイティアさんの体から緊張が解け
ヒクつきながら呼吸を整えている
その呼吸に合わせて膈口から どぶつと精液が溢れ出る

ヘイヴィアは 自分の放った戦果を確かめるため
目の前で丸出しの肉びらを観察している

「あのフローレイティアさんでも はあ はあ…
こないやらしい音たてながら ザーメン吐き出すんですね」



「もう一回…ダメっすか？」

「どうせ…一回じゃ済まないと思ってたわ…早く…入れなさいよ」

「あとお…よろしければもうちよつと色っぽい声を出してくれても…」

「嫌よ…なんでそんなこと…お前は普通に喘ぐより…罵るくらいの方が好きなんじゃないの？」

「ま…まあ確かに…」



初めて他人のセックスを生で見ってしまった！
エロ動画のような見ず知らずの男優と女優ではない
「どうせ一回じゃ済まないと思っただけか…」
それどころか自分と何度も求め合ったこともある相手が…

他の男と…

その時 フローレイトエアさんの目が
コチラを見たような気がして
思わず扉から離れ その場を後にした
もうちよつと色んな男と…

「嫌よ なん
っていうか
罵るくらい
なの？」

「ま まあ確かに…」





二人の交接を目撃して

一度はその場を立ち去ったものの

作戦のことも聞きたくて

数十分後に再び現場を訪れた

かすかに男女の汗の匂い

自分の匂いには気付かないのに

他の男の匂いはよく分かる気がする…

目を凝らせば 床には色んな体液が滴っているかもしれない

「あらくウェンサー 今来たの？ 私は一勝負終えたところよ」

そこにはフロレーティアさんだけが居た

(一勝負…)

ついさっきまでこの場所でヘイヴィアに交尾されていたこの人は
少しだけ紅潮しているような気はするものの
いつも通り涼しげな顔をしている

「どうしたの 何か用？」

「へ、ヘイヴィアを探してたんですけど…」

「ふーん」



何食わぬ顔で話しかけてきているものの
セックス直後特有の生々しい湿り気と気だるさを醸し出している

「今からシャワーを浴びようと思うんだけど …一緒に浴びる？
なんならその後 私の部屋で休憩していてもいいわよ？」

こんなに直接的に誘われるなんて珍しい
さつきまで雄のすべてを受け入れていただけに
感覚が高ぶって麻痺しているのだろうか

ついてきてしまった：

フローレイティアさんは 先にシャワールームに入っていく

今まで何度も身体を重ねてきた関係とは言え

さつきまで他の男とセックスしていた女に誘われて

ホイホイ付いてきてしまった自分が情けない：

「入ってきていいわよ」

フローレイティアさんから声がかかる

女子と一緒に風呂に入るなんて…その先は暗黙の了解だけれど

すでに下半身は期待感を最大限に主張してしまっている

「洗ってほしい？」



「……あら」

「もうそんな場合じゃないのかしら」



「あの… 実は今 ゴムを持ってなくて とりあえず…」
フローレイティアさんがこちらを向き 首に手を回してキスを求めてくる

「今日はいらないわ なんだか体が火照っちゃって…」
たしかに 鼻先にかかる吐息は すでにしっとり熱を帯びていて
最初からこんなに雰囲気たっぷりなキスをされた覚えなんてない

ヌルっと柔らかい舌が 大胆に侵入してくると同時に
フローレイティアさんの生暖かい唾液と甘い香りが 口の中に蕩けて広がる

ちゅぷっ♡ んっ ♫ ああ…

「生でしてほしい気分…♡」

手からはみ出すほどの爆乳を下から受け止め 持ち上げるように揉みしだく
ボディソープの泡で滑って すくつてもすくつても柔軟に手からこぼれていく
乳房の割に控えめで色の薄いぷくっとした乳首を ハイヴイアも堪能したのだろうか

「んむっ 積極的ね…♡」

キスでフローレイティアさんの口を塞ぎながら
臨戦体勢になっているペニスを 秘裂にあてがうと
溢れている体液がローション代わりになって そのまま膣内へ誘い込まれた

くちゅ…♡ にゅぷう…

さつきまで別のモノと一戦交えていた女壺は
次の獲物も根元まであつさりやと啜え込んだが
膣肉はキュンキュンとうねり
避妊具を纏わない剥き出しの敏感なペニスと直に痙攣を共有する

「んっううう… はあああん♡」
フローレイティアさんからは
か細く艶めかしい息が漏れる

ぬっぶ ぬっぶ♡

ぬちよっ ぬちよっ♡

いつもならこんな
簡単にいくことは無いのに
二人を食べ比べて
興奮しているのだろうか…

「お風呂でするの好きなの？
焦らないで ゆっくり動きなさい♡」
…耳元で囁かれる



「はっ♡ はっ♡ ……一番落ち着くわ♪
クウエンサーのおちんぽ♡」

一番、という言葉に
二番の存在を突き付けられる…



「見てたでしょ 私とハイヴィアの勝負…」

!!

「アイツ5回も…」

エンジンが掛かったように鼓動が大きくなる

「お前以外の男に 初めて汚されちゃった」



「おっ、ちよつと おつきくなつた！」

心地良くうねる膣中で 粘膜同士が直接絡み合っているだけに 反応はダイレクトに伝わってしまう
「ビリヤードで 途中までは白熱した良い勝負してたんだけど…」

いつのまにか 負けたらやらせるって話になってて ついついセックスされちゃった」

他の男との情事を打ち明けられた事もだが 出歯亀がバレていた事に動揺しつつも
平静を装ってぬちちゅ、ぬちちゅと出し入れを続ける

「お前に教わったフェラチオも披露したわ…」
跪いて一生懸命しゃぶってたんだけど アイツ調子に乗ってペニスで私の頬を叩いたり
私の口をオナホ呼ばわりして滅茶苦茶にピストンしたり 屈辱よ」

屈辱とは言うものの フロアレイティアさんに悲壮感などは無く あっけらかんと吐露は続く…

「あんな所で 誰かに見られたらマズいって言ったのに…」

でもまあ あんなになりふり構わず求められるのも 嫌いじゃないから♡
そのまま なし崩し的にハメられて…

現場を見ていただけに…動物のように後背位で繋がる二人の映像が生々しく蘇る

「ゴムなんて持って無かったから しかたなく生で挿入を許可したけど…」

まさか中で射精するとは思ってなかったわ
ううん、もしかしたら半分は期待してスリルも愉しんでいたのかも…

わざと卑猥な単語に抑揚をつけて 妖艶に囁いてくるところから察するに
こちらの反応を伺って愉しんでいるようだ

「さんざん私の生膣を犯して 自分だけ気持ち良くなって 無責任に子作りしやがった…」

今お前がペニスを入れているこの穴に 汚い精液をこっぴとりと…
そういうことなら…

「…男漁りを覚えてはいけないので そろそろちゃんと躡けておかないといけませんね」
「えっ？」

カキッ

アイッ
アイッ

むちむちの尻肉をがしつと驚掴みして抱きかかえ
「あんっ♡ ちよつといきなりっ! 激しっ!」

テンポアップして 急に一番奥まで侵入してきた熱い肉根に驚き
フローレイティアさんがコアアラのようにギュツとしがみついてくる

ぬちゅっ! ぬちゅっ! ぬちゅっ!! どちゅっ!! どちゅっ!!

「どつちが良いんですか?」

俺のと:ヘイヴィアのチンポっ!」

「あっ♡ あっ♡」

「分かんない: イイっ!」

ぢゅぷっ!ぢゅぷっ!と突き上げれば

肉ピラはいくらでもペニスの侵入を受け入れていく

「チンポならどれでも イイってことですかっ?」

「ちがっ:あんっ♡」

「やっぱりっ とんでもない淫乱ビッチですね!」

締め付けてくる膣壁を擦って 肉の杭を膣奥の奥まで何度も打ち込み続ける

「そんなに:激しくしたらっ んあっ! イっちやうからっ

あんっ♡」



「一晩に何回も ド淫乱上官を満足させてきたのは 誰のチンポですか？」

「誰が淫乱っ あんっ… こらっ！ ひああんっ♡ ああっ♡」

「分からないなら 自覚してもらわないといけませんね！」

ぬりゆぬりゆと淫らに絡みつく肉壺を ペニスで力強く突き込む

「毎晩のように 部下を呼び出して 好き放題啜えこんで…」

「分かったからの くっ クウエンサーのおちんぼが一番だからっ… あっ♡」

「言えたじゃないですか

ちゃんと覚えてくださいよ」

「覚えたからっ

一番のおちんぼっっ！

もうダメ！ イクっ！！」

「子宮に直接っ

マーキングしますよ！」

「ちようだいっ♡ あんっ♡

一番イイちんぼで種付けっっ！」

より確実に膣内射精を成功させるため

両腕を首に回してぴったりと合体したまま絶頂していく

「ん、んうっっっ…!! イクっっっ…!!」

フローレイティアさんの引き締まった上半身が大きく跳ねて反り返る



「っんんんっつーっー!!」

尻肉がキュツと締まり 膣肉が運動して一層収縮し
汚辱の瞬間を待ち望んでいる

ぬちゅっ!

ぬちゅっ!!

ぬちゅっ!!

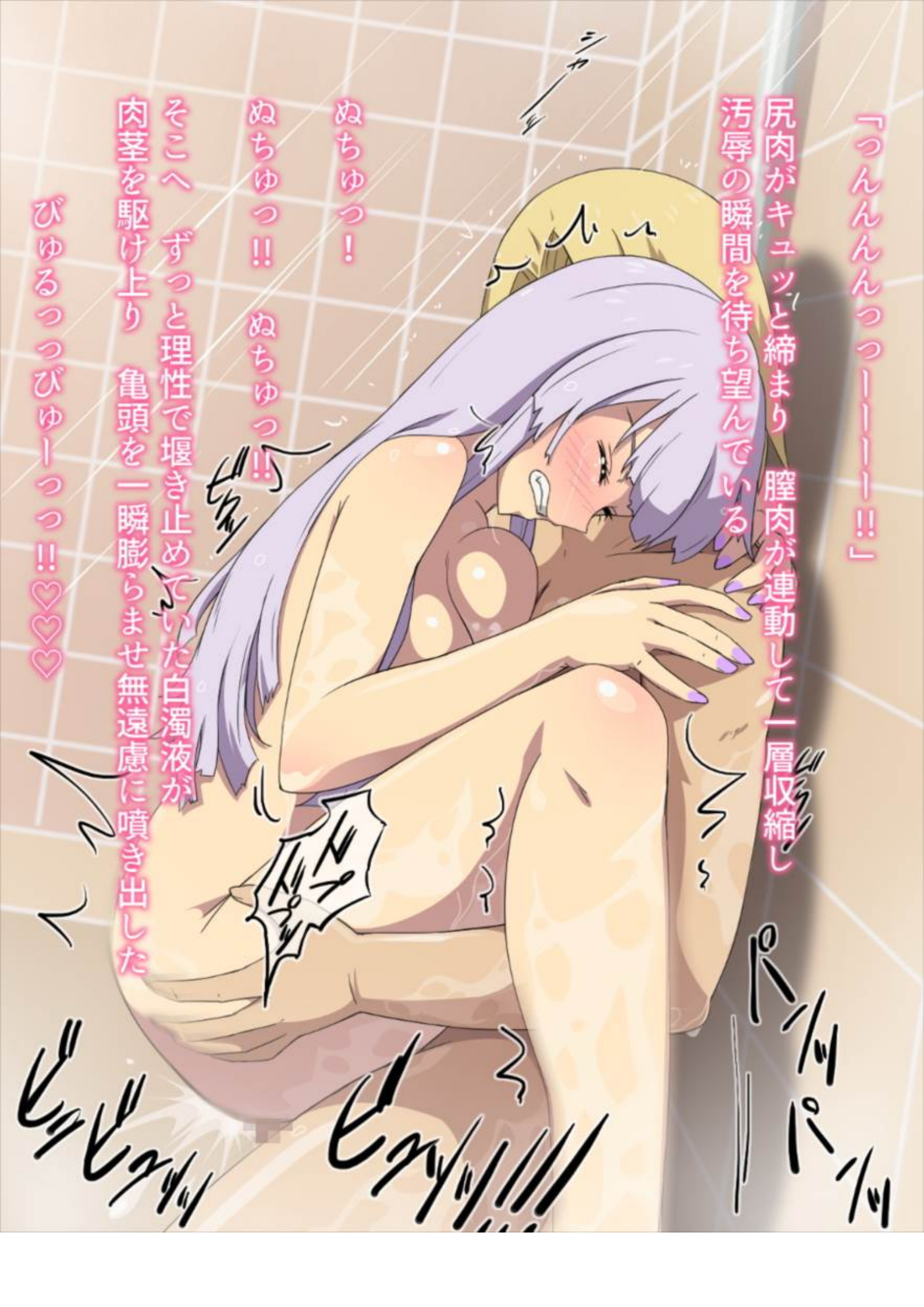
そこへ ずっと理性で堰き止めていた白濁液が
肉茎を駆け上り 亀頭を一瞬膨らませ無遠慮に噴き出した

びゅるっつびゅーっ!!♡♡♡♡

びゅるっつびゅーっ!!♡♡♡♡

びゅるっつびゅーっ!!♡♡♡♡

びゅるっつびゅーっ!!♡♡♡♡



ビクンツッ… ビクンツッ…

フロレーティアさんの膝はガクガクと震え
身体は痙攣を続けて 意識は蕩けたままのようだ

あ…あ…

(やばい 調子に 乗りすぎたか…?)

「もう 許ひて… はっ はっ はっ はっ…」

射精を終えたペニスを引き抜くと
蜜壺からは 色々混ざり合った熱い体液が溢れる

。。。。。。

198

アハハハハ

絶頂は収まり合体は解いたが シャワーに打たれながらそのまま抱き合っている
胸に押し付けられていたおっぱいも ゆっくりとした浮き沈みに戻りつつある

「落ち着きました?」

「ああ...やれば 出来るじゃない♡」

ひん...

「それにしても...悪知恵が働くというか

ヘイヴィアを噛ませ犬みたいにな...

自分の...女を 他の男に抱かせて興奮するなんて

本物の変態なのねえ...ちよつと心配になってきちゃったわ

「おかげで フローレイティアさんと相性がいいですよ」

「まったく...」

.....

「もしかして今...彼女ぶってました?」

「うっさいっ!」

ひん...

「あと 男漁りなんてしないわよ ちゃんと相手は選んでるわ♡」

(いやいやいや…2人相手がいる時点ですでに…)

んん…

「おちんぽも まだまだ元気だね♡
あんっ 今はもうダメよ
続きは夜 じっくりと…」







くっ
お前たちツ…!!
これは 一体何の真似だツ

「くそっ 離せっ!!」

さんざん暴れやがって：
ケツ丸出しのくせにW

さつさと ヤっちまおうぜ
挿入れちまえば
大人しくなるだろ

さつきから良い匂いが
ブンブンしてたまんねえっす

よーし足押さえとけ 味見してやる

うっす コラッ 暴れんなっ
太もも柔らかくて スベスベっすよ

へっへっへ：
震えてるじゃねーか 心配しなくても
すぐに気持ち良くしてやるからよ

「誰が： 気持ちよくなんかつ」

爆乳上官はどんな喘ぎ声 聞かせてくれるのかなW

くっ お前たちツ：!!

これは 一体何の真似だツ



レイプされたのに
こんなに気持ちいいなんて…
こいつら絶対殺してやるっ…!!



ふう センパイ一発目ゴチっすー♪
おう 一発目つと 全然声漏らさなかつたな

暴れだした時はどうなるかと思っただけど
全然抵抗しなくなつたし 合意ってことですかね

うひよー すぐえ睨んでる

お前が下手糞だからだよw

えーでも最後の方 痙攣しながらイツてたつすよ

まんこの締め付けハンパなかつたつすもん

だつてよ少佐w おカタイ少佐と言つても

突っ込んじやえば ただの食べ頃のメス穴だな

そういや処女じゃなかつたつすね

だろうな こんなデカパイのドスケベ女

男なんて いくらでも食い放題だる

恋愛なんてこの次々なんて顔して

ヤルことは やつてたんすね

ばーか むしろヤルことやつてたから

昇進出来るんだよw

さて俺も少佐と遊ばせて貰おうかな

今まで相手にしてきた おっさん連中とは

若さが違うから 期待してくれよ 少佐♪

少佐のおかげで

こんなにスッキリしましたよ



くそっ！！

こんな奴に無理やり侵入されて
射精するために体を利用された！

ねじ込んだ途端に

勝ち誇ったような顔をしやがって

卑猥な言葉を浴びせながら

何度も腰を打ち付けられて

絶頂顔も見られた！

アイツ：あんなに固いモノを！

私の内側より太くて無理やり押し拵げられる感覚

存在感が凄くてドコを動いているのか意識させられる

今までのどんなセックスより合体を実感して

アソコから全身に快感が広がった

こっちが絶頂してるの気付いていたくせに

めちやくちやにピストンされて 意識を保つのが精一杯で

イク瞬間の痙攣を共有体験してしまった

あの薄いゴム一枚が無ければ 汚い体液を全部入れられてた

?? 何か書かれて！

ゲームのスコア感覚で 回数を数えるなんて

…こいつら絶対殺してやる！！

へ「でも実際お偉いさんを 体で接待なんてあるんですか？」
ク「おい ヘイヴィア…」

ふふ…命令さえあれば
上官や議員、軍に貢献する著名人
誰とでも仲良くするわよ

いつも予約が一杯で 週末ともなれば朝まで穴という穴で
脂ぎった中年オヤジと代わる代わるズコバコよ♡
最初の頃は嫌だったけれど…まあ仕事だと割り切ったわ





情けないぞ
フローレイトイア少佐
さつきから
イキっぱなしじゃないか

派手にスケベ汁を
撒き散らしおって

パッパッ

パッパッ

やほ

やほ

中年達は無駄に射精したりしない：
さすがにお前たちみたいないな精力は無いからね

その分 女の楽しみ方には拘りがあるみたいよ

寄ってたかって私の肉体を弄んで
強制的に何度も絶頂まで連れて行かれる
そして私に一番屈辱を感じさせながら射精するの



快楽に溺れて 醜態を晒し
男勝りな私にメスの本能を認めさせて
子宮に精液を懇願させるの…

あんな豚共でもオスはオス
極上のセックスで野太い肉茎に子宮口をノックされ続けられれば
嫌でも子宮が精液を欲しがってしまうのよ…





最近じゃチンポを見ただけで
雌の顔をしておって
これじゃ娼婦と変わらん

もっと昔のように
暴れて抵抗したまえ

ろくに休みも与えられないまま
隆奥に快楽を叩きつけられ続けていると
頭では何も考えられなくなってきた

中出しされるって解っていないながらも
腰を振り続けるしかなかった

今でもね セックスすると その時のトラウマが必ず蘇ってくるわ
それでもお前たちなら...お前たちが
激しく求めてくれてる時だけは 忘れることが出来る...



そのっ何か
言いたいことは？



命令だ...
感想を言え

ブラボー



昔の日本ではこういうのが
十代の学生らしい制服
だったらしいっすよ!!

じゃーん

ほう!?



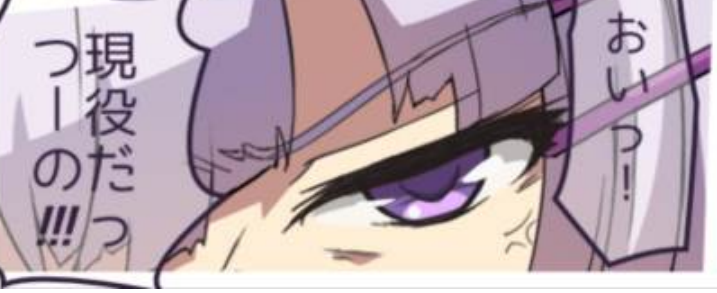
ばい〜ん

たっ
文が...



Hな動画みたい!!
Hなお店みたい!!

これはまた
なんとも...



現役だっ
つーの!!!

おいP!



ぷり〜ん

「お前たちの どうせ衣装なんてどうでもいいんでしょ！」

「すごく似合っていて可愛いですよ フローレйтиア先輩」

「そんなことっ、そのっ、可愛いなんてお前たちにしか言われたことないわよバカ！」

可愛い上官はこの期に及んで まだ妙なところに恥じらいを感じるらしい

「そりゃあ俺たちはフローレйтиア先輩の可愛いトコを隅々まで知ってますから♪」

「ちよつとヘイヴィアッ!

ドコを触って…」

「おっ その反応だと

挿れたこと無いんですね?」

「まさかっ 挿れるって…」

「へへっ フローレйтиア先輩なら余裕でしょ♪」

アッ



ふあ

「へイヴィアは亀頭で尻肉の割れ目を探り 先輩の桜色のアナルを見つけ出し
「そんなの無理って ちよつとつコラっ!!」
「尻穴の処女もーらいっつと ーんんっ」

あゝ

「んううっ はああああ…ダメっ!!」
…ゆつくりと侵入していく

にゅぷぷ…っぶん♡

ぬりゅんっ♡ ぬりゅんっ♡

あ

「ふああっ だめ… ふあっ あっ♡」

へイヴィアは巧みに腰を使い
ヌルヌルと排泄穴を出入りする
排泄穴を弄ばれる恥ずかしさが

認めたくない快感を誘発していく

アッ
アッ

アッ
アッ



ふあ...

ぬちゅっ！ じゅぷっ！ ぬちゅっ！ じゅぷっ！

クウエンサーに膣奥を突き上げられ 快感を味わう間も無く
後ろでヘイヴィアが直腸へ新たな快感をねじ込んでくる

「うあっ♡ はっ はっ はっ はっ はっ はっ」

先輩は 予想できないタイミングと
経験したことの無い快感に対応できず

口をぱくぱくさせてかろうじて呼吸している

「後ろの方が好きなんじゃないですか？」

「そんなことっ...!!」

イヤっ 変態みたいっ♡♡♡♡♡

あっ じゅぷっ！ じゅぷっ！

「うおっ ギッチギチでスゲエっ！ チンポ千切れそう!!」

「あんっ♡ ああああっ♡」

アッ アッ

アッ アッ

「おしり… あな… きもちいい はっ♡ はっ♡ はっ♡ はっ♡」

ずるんとペニスを引き抜くと ぽっかり開いたアナルから白く粘る糸が伸びる

「はあ はあ はあ はあ…」

二人の関係を打ち明けられた時は驚いたけど
こうして仲間に加われてガス抜きもでき
後ろの処女も頂いた…
と、ヘイヴィアは一息つくが…

フッポフッポ



「なんで…こう」

「お前たちは普通じゃなくて お尻に入れようとするのよ
コンビ組んでると性病も似るのかしら」

「…すでに後ろも経験済みだったようだ」

「普通じゃ満足できなくなったらどうしてくれるのよ」

「そんなの決まってるじゃないですか 俺たちがいつでもお相手しますよ」

ゴゴゴゴゴゴ…

「ほう？そうかそうか (怒) よし、お前たち尻を出せ」

「「は？」」

「相手をしてくれるんだろ♡」

フッポフッ

トド

ヒヒヒヒ





おっ！
乳首見えた気がする！

下は…もうちよい
もうちよい…

ダメだっ 穿いてるかどうか
気になって集中できねー！

ちよっと聞いてこいよ

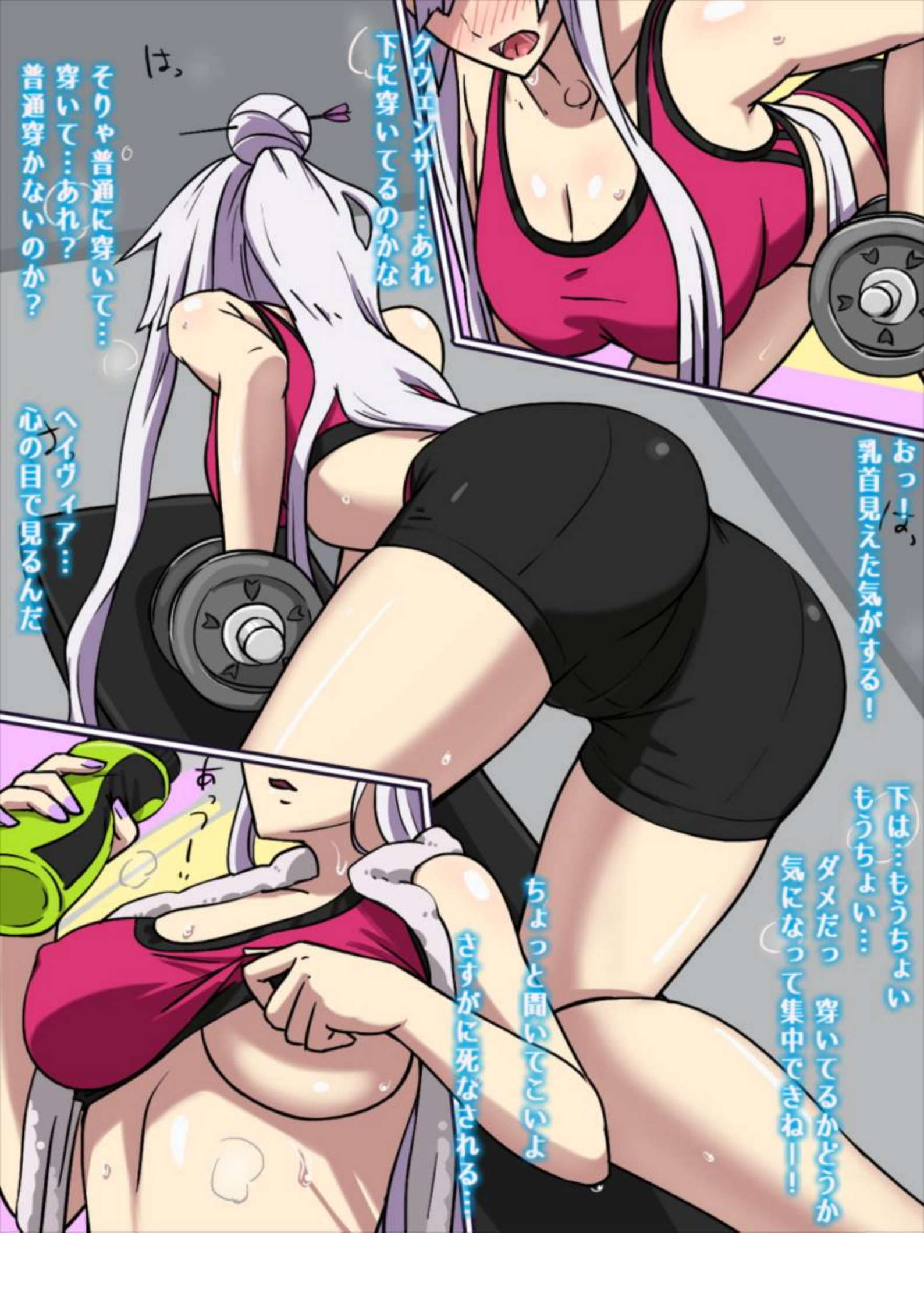
さすがに死なされる…

クウエンサー…あれ
下に穿いてるのかな

は、

そりゃ普通に穿いて…
穿いて…あれ？
普通穿かないのか？

ハイヴィア…
心の目で見るんだ



皆様いきなり
がっつきですわよ♪

んむっ♡

んっ

やばい

んん~♡

やばい

んっ♡

んむっ

おほほっ♡
これで6本目♪

おほほ♡

日頃溜め込んだストレスと精液
全て吐き出させてあげますわ

あんっ♡

蒸れた汗と雄の匂い♪

体の奥がきゅんきゅん
しちやいますわ♡

おほほほ♡

こちらの方が
大きいですわね♡

貴方は
後ろからいかが？

あっ♡

あはあ♡

みなさま
お疲れさまです♪

おほほほっ♡

日々鍛えた肉体で
その立派な肉棒を

ずっこんぱっこん
しっかりと突き入れて

私の膣内（ナカ）で
果ててくださいませ♡

あんっ♡

逆流ザーメンが
溢れちゃいますわ

来年は貴方のご参加を
お待ちしておりますわ♡

あっ 脈打ってっ♡
今のっ…孕んだかも♪